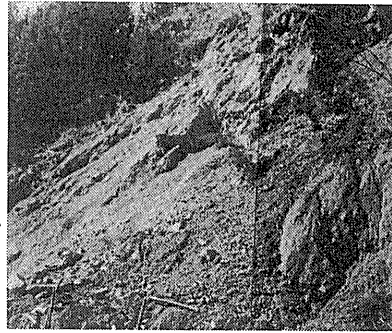
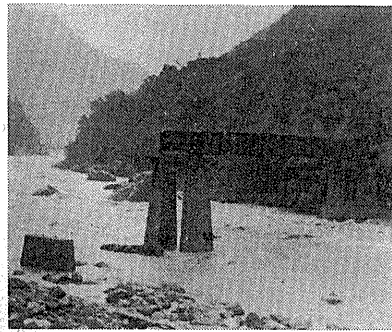


第三章 天 災

西南日本の外帯に位置する我が村は、黒潮からの雨雲の北上を、四国カルスト台地が阻んで、外帯の海岸地帯をこえる多雨地帯となる。わけて晩夏から中秋にかけての台風期には、台風進路が近接すること多く、風害を伴う出水の災害に年数回見舞われる。たとえ進路が、東側・西側いずれの北上であるにせよ、台風圏内である限り、その風水被害は免かれない。だからわが村の天災は、風水害がほとんどである。遠く庄屋制のころからの災害記録を抜き書きしてみる。元和四（一六一八）―八一四、大出水。同五（一六一九）冬、豪雪。同六（一六二〇）―一六、大出水。寛永元（一六二四）



台風による村道の災害



黒川橋流失

―二二―二三、地震。寛文九（一六六九）、大出水、晩秋風雪による冷害。同二三（一六七三）、大出水。延宝二（一六七四）大出水。同三（一六七五）八一四、大出水。同六（一六七八）―七一八、大出水。同七（一六七九）―八一四、大出水。天和三（一六八三）豪雪。貞享元（一六八四）―一〇―九、大風。同二（一六八五）―五―一二、大出水。七一、降雹。七―三〇、大出水。同三（一六八六）―五―一九、大出水。

元禄四（一六九二）―八一二、風水害。などの記録ではほとんど風水害が大部分を占めている。享保一七（一七三三）―一五―七、水雨による冷害。天明二（一七八二）～天明七（一七八七）冷害による飢饉。天保四（一八三三）～同七（一八三六）冷害による飢饉。以来今日まで約一世紀に亘って、毎年数回の台風災害を含む天災が繰返えされてきた。昭和九（一九三四）―九、室戸台風。同二〇（一九四五）―九、枕崎台風。同二五（一九五〇）―九、ジェーン台風、同二六（一九五二）―一〇、ルース台風。同三四（一九五九）―九、伊勢湾台風。同三六（一九六一）―九、第二室戸台風。従来台風名は、上陸地点あるいは通過地点を冠して呼んでいたが、昨今はその年内の発生番号を冠して、何号台風と呼んでいる。

被害状況については、以前は農作物・人畜・建物などに関わるものであつたが、諸種の開発が進むにつれて、道路・溝渠・橋梁など各種工作物に関わるものが多くなった。そのうち特筆すべきものとして、昭和三八（一九六三）年八月九日の台風九号は、行方不明者一名をはじめ、龍宮橋の流失、とくに高野本川の氾濫による災害は大きく、未曾有の大被害となつて、激甚災害の適用地域となつた。また、昭和五七（一九八二）年八月二七日、第一三号台風（降水量、五黒電六二六・面一電四五七ミリメートル、国道三三三号線柳谷洞門路面陥没）は、天災中の特例として、われわれ柳谷村民の脳裏に強く銘記されるものとなるであらう。